

名医が語るお母さんへの手紙 東日本大震災から 10年目を迎えて



3月11日で、東日本大震災から大きな区切りである10年目を迎えます。ママゴンには5年目の区切りに「止まったままの時計」のテーマで書きました。震災翌月のCLINICNEWSの記事を含めて、当時を振り返ってみます。

3月11日14時46分、予防接種の最中に、突然の轟音(聞こえたような気が)と、とてつもない大きな揺れが。あまりの大きさと覚えてないけど、時間も長く、立てられないほど。患者さんたちの大きな悲鳴も飛び交う状況。たまたまクリニックにいた4組の家族とともに、スタッフは抱きあいながら余震のなかで冷静に対応。被害の大きさが気になっていたけど、停電でテレビも見れず、もちろん携帯もつながらない……。今でも思い出すだけで、ぞっと

します。やっと地震の揺れが収まり、患者さんとともに、笑顔でピースサインを撮ったことが思い出されます。しかし、その裏で起きている津波による想像もできないような被害を知る由もありませんでした。停電と情報が遮断され、時に流れてくる被災の状況を知るたびに、現実とは思えない不思議な感覚に襲われました。

何はともあれ、小児科医としての使命を果たすため、避難所巡回、救護所への出務、更には発災直後から情報発信、そして診療所早期再開に努めました。「お母さんの不安・心配の解消」の理念のもと、放射線や診療に関する情報発信に努めました。患者さんからは、感謝、報告などが寄せられ普段の取り組みの有効性が確認ができました。心温まるメッセージが数多く寄せられ患者さんの有難さとともに、コミュニティ

ケーションの重要性を実感しました。震災後は毎年フェイスブックに投稿しています。5年目の記事に対して届いた、とても嬉しいメッセージを紹介します。

「今でも忘れられません。あの瞬間を待合室で過ごしたこと。崩れ落ちたパソコンや、散乱したカルテ。みんな動揺してるはずなのに。『どうした？ん、薬は出せないが診ることは、出来るぞ』と、診察を続けた川村先生。感動しました。あれから待合室にあの時の写真。川村先生との何気ないお話にリラックス出来た私は自然とピースサインしてましたね。夕方自宅に戻り、一気に現実が。『川村先生のところに戻りたい』と、冷蔵庫の食べ物クローラーボックスに詰めて玄関を出ようとしたところに、余震が……。体が震えて、足がすくみ。ひたすら、主人の帰りを自宅で待つことに。あの時は川村先生、スタッフのみなさんには助けられました。本当にありがとうがとうございました。」

まもなく東日本大震災から10

年を迎えます。長かったような短かったような10年。被災地の復興も進み景観が変わってしまいう震災を思い出すものは減り、見かけ上は新しい生活に戻っています。しかしながら、目には見えないものの恐怖はまだまだ続き、遺体さえ見つからない被災者が2500人もいるのです。被災者の心の中では、10年経った今でも震災の終わりは見えていないのです。未だに5年前テーマ「止まったままの時計」の方々もたくさんいるのです。

震災から10年を契機に、改めて支援とは何かを考えています。さて皆さんは何をしたらいいのでしょうか。最も重要なことは、東日本大震災という大きな出来事を風化させないことです。何もしないという思いの人もたくさんいるでしょう。でも何もしなくてもいい、何もできなくても大丈夫です。このような機会に記事を通して震災のことを考えるだけ、被災地や被災者を思うだけ、そして「忘れないこと」が最も大事なことです。



小児科専門医 川村 和久

仙台市在住。医療法人社団かわむらこどもクリニック(仙台市)院長。日本一の小児科サイトを運営。「お母さんの不安・心配の解消」を開業理念として、様々な子育て支援活動に取り組んでいる。宮城県小児科医会副会長。日本外来小児科学会理事。
<http://www.kodomo-clinic.or.jp>



かわむらこどもクリニック
フェイスブックページ